

## 0.1 H26 数学必修

<https://www.math.kobe-u.ac.jp/HOME/home-j/gif/h26.pdf>

[1] (1)  $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = (x+y)/2 \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} + (x-y)/2 \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \end{pmatrix}$  である.  $x=y=0$  でないなら一次従属である.  $x=y=0$

のときは  $c \neq 0$  にたいして  $c \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = 0$  となるから一次独立でない.

(2)  $\begin{vmatrix} 5 & -2 & x \\ 2 & -1 & y \\ 3 & 1 & z \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 1 & -2 & x \\ 0 & -1 & y \\ 0 & 11 & z-5x \end{vmatrix} = -(z-5x) - 11y$  である.  $5x - 11y = z$  が成り立つとき一次従属.

(3)  $\{u_1\}$  は一次独立である.  $\{u_1, \dots, u_{k-1}\}$  が一次独立と仮定する. このとき  $c_1 u_1 + \dots + c_k u_k = 0$  とする.  $\lambda_k c_1 u_1 + \dots + \lambda_k c_k u_k = 0$  である. また  $A$  をかけると  $\lambda_1 c_1 u_1 + \dots + \lambda_k c_k u_k = 0$  である. よって  $\lambda_1 c_1 u_1 + \dots + \lambda_k c_{k-1} u_{k-1} = \lambda_k c_1 u_1 + \dots + \lambda_k c_{k-1} u_{k-1}$  である. 一次独立性から  $\lambda_i c_i = \lambda_k c_i$  であり  $\lambda_i \neq \lambda_k$  より  $c_i = 0$  である. このとき  $c_k = 0$  であるから  $\{u_1, \dots, u_k\}$  は一次独立である.

(4)(a)  $c_0 x + c_1 A x + \dots + c_{n-1} A^{n-1} x = 0$  とする. 両辺に  $A^{n-1}$  をかけると  $c_0 A^{n-1} x = 0$  である.  $A^{n-1} x \neq 0$  であるから  $c_0 = 0$  である. 次に  $A^{n-2}$  をかければ  $c_1 = 0$  が分かる. これを繰り返して  $c_0 = \dots = c_{n-1} = 0$  であるから一次独立.

(b)  $n$  個のベクトル  $\{x, Ax, \dots, A^{n-1}x\}$  が一次独立であるからこれは  $\mathbb{R}^n$  の基底である. よって任意の  $y \in \mathbb{R}^n$  は  $y = c_0 x + \dots + c_{n-1} A^{n-1} x$  とかける.  $A^n y = c_0 A^n x + \dots + c_{n-1} A^{2n-1} x = 0$  であるから  $A^n = O$  である.

[2] (1)(a)  $\varphi: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}_+; x \mapsto e^x$  は全単射である.  $\varphi(x+y) = e^{x+y} = e^x e^y = \varphi(x)\varphi(y)$  であるから  $\varphi$  は群の同型写像である.

(b)  $\varphi: \mathbb{Q} \rightarrow \mathbb{Q}_+$  が群同型写像とする.  $\varphi(1) = \alpha$  とする.  $\varphi(\sum_{i=1}^n 1/n) = \varphi(1/n)^n = \alpha$  である. すなわち  $\varphi(1/n) = \alpha^{1/n}$  である.  $\alpha^{1/n}$  が有理数にならないような  $n$  は存在するからこれは  $\varphi$  が同型写像であることに矛盾.

(2)(a)  $G'$  の単位元を  $e'$  とする.  $f: G \rightarrow G'$  に対して  $\ker f = \{x \in G \mid f(x) = e'\}$  である.  $g \in G, x \in \ker f$  に対して  $f(g^{-1}xg) = f(g)^{-1}f(x)f(g) = f(g)^{-1}f(g) = e'$  より  $g^{-1}xg \in \ker f$  であるから  $\ker f$  は正規部分群.

(b)  $f(g+g') = (f_1(g+g'), f_2(g+g')) = (f_1(g) + f_1(g'), f_2(g) + f_2(g')) = (f_1(g), f_2(g)) + (f_1(g'), f_2(g')) = f(g) + f(g')$  である. よって  $f$  は準同型.

(3)  $\pi_1: G \rightarrow G/N_1, \pi_2: G \rightarrow G/N_2$  を自然な全射とする.  $\pi: G \rightarrow G/N_1 \times G/N_2$  を  $\pi(x) = (\pi_1(x), \pi_2(x))$  で定める. (2) から  $\pi$  は準同型である.  $\ker \pi = \{x \in G \mid \pi(x) = (e_1, e_2)\} = \{x \in G \mid \pi_1(x) = e_1, \pi_2(x) = e_2\} = \{x \in G \mid x \in N_1, x \in N_2\} = N_1 \cap N_2$  である.

よって  $N_1 \cap N_2$  は正規部分群で準同型定理から  $G/(N_1 \cap N_2) \cong G/N_1 \times G/N_2$  である. 右辺はアーベル群であるから, 左辺もアーベル群である.

[3] (1)(a)  $x > 0$  で  $1 - 1/(1+x) > 0$  である. よって  $0 < \int_0^x 1 - 1/(1+t) dt = x - \log(1+x)$  である.

$x > 0$  で  $x - 1 + 1/(1+x) \geq 2\sqrt{(x+1)\frac{1}{1+x}} - 2 = 0$  であるから  $0 < \int_0^x t - 1 + 1/(1+t) dt = x^2/2 - x + \log(1+x)$  である. すなわち  $x - \log(1+x) < x^2/2$  である.

(b)  $\sum_{n=1}^{\infty} (\frac{1}{n} - \log(1 + \frac{1}{n})) \leq \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{2n^2} < \infty$  であるから収束する.

(2)  $f_x(x, y) = 2xe^{x-y^2} + (x^2 - 8y)e^{x-y^2} = (x^2 + 2x - 8y)e^{x-y^2}$  である.  $f_y(x, y) = -8e^{x-y^2} - 2y(x^2 - 8y)e^{x-y^2} = (16y^2 - 2x^2y - 8)e^{x-y^2}$  である.  $f_x(x, y) = f_y(x, y) = 0$  とすると,  $x^2 + 2x - 8y = 0, 16y^2 - 2x^2y - 8 = 0$  である. これを解く.  $(x^2 + 2x)y = x^2y + 4$  より  $xy = 2$  である. よって  $x \neq 0$  であるから  $8y^2 - 4/y - 4 = 0$  である.

よって  $8y^3 - 4y - 4 = 0$  である.  $8y^3 - 4y - 4 = (y-1)(8y^2 + 8y + 4)$  であり  $2y^2 + 2y + 1 = 2(y+1/2)^2 + 1/2 > 0$  であるから  $x = 2, y = 1$  が唯一の実数解である.

$f_{xx} = (2x+2)e^{x-y^2} + (x^2+2x-8y)e^{x-y^2} = (x^2+4x-8y+2)e^{x-y^2}$ ,  $f_{xy} = -8e^{x-y^2} - 2y(x^2+2x-8y)e^{x-y^2} = (-2x^2y - 4xy + 16y^2 - 8)e^{x-y^2}$ ,  $f_{yy} = (32y - 2x^2)e^{x-y^2} - 2y(16y^2 - 2x^2y - 8)e^{x-y^2} = (-32y^3 + 4x^2y^2 + 48y - 2x^2)e^{x-y^2}$  である. よって  $(2, 1)$  におけるヘッセ行列は  $\begin{pmatrix} 6e & -8e \\ -8e & 24e \end{pmatrix} = 80e^2 > 0$  であり  $f_{xx}|_{(2,1)} = 6e > 0$  より  $f$  は  $(2, 1)$  で極小値  $f(2, 1) = -4e$  をとる.

(3)  $\sqrt{9-x^2-y^2} = \sqrt{1+x^2+y^2}$  をみたすのは  $x^2 + y^2 = 4$  のときである. よって求める体積を  $V$  とする.  $D = \{(x, y) \mid x^2 + y^2 \leq 4\}$  とする.  $V = \iint_D \sqrt{9-x^2-y^2} - \sqrt{1+x^2+y^2} dx dy$  である.  $(x, y) = (r \cos \theta, r \sin \theta)$  ( $0 \leq r \leq 2, 0 \leq \theta \leq 2\pi$ ) と極座標変換するとヤコビアンは  $r$  である.

$$\begin{aligned} V &= \int_0^{2\pi} \int_0^2 (\sqrt{9-r^2} - \sqrt{1+r^2}) r dr d\theta \\ &= 2\pi \int_0^2 (\sqrt{9-r^2} - \sqrt{1+r^2}) r dr \\ &= 2\pi \left( \int_0^2 r\sqrt{9-r^2} dr - \int_0^2 r\sqrt{1+r^2} dr \right) \\ &= 2\pi \left( \left[ -\frac{1}{3}(9-r^2)^{3/2} \right]_0^2 - \left[ \frac{1}{3}(1+r^2)^{3/2} \right]_0^2 \right) \\ &= 2\pi \left( -\frac{1}{3}(5^{3/2} - 27) - \frac{1}{3}(5^{3/2} - 1) \right) \\ &= 4\pi(14 - 5\sqrt{5})/3 \end{aligned}$$

(4) 任意の  $\varepsilon$  に対してある  $N \in \mathbb{N}$  が存在して任意の  $n \geq N$  に対して  $\alpha - \varepsilon < a_{n+1} - a_n < \alpha + \varepsilon$  である. よって  $a_n + \alpha - \varepsilon < a_{n+1} < a_n + \alpha + \varepsilon$  である. すなわち任意の  $k \in \mathbb{N}$  に対して  $a_N + k\alpha - k\varepsilon < a_{N+1} + (k-1)\alpha + (k-1)\varepsilon < \dots < a_{N+k} < a_N + k\alpha + k\varepsilon$  となりたつ. よって  $\frac{a_{N+k} + k\alpha - k\varepsilon}{N+k} < \frac{a_{N+k}}{N+k} < \frac{a_N + k\alpha + k\varepsilon}{N+k}$  である.  $k \rightarrow \infty$  とすると  $\alpha - \varepsilon < \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{a_n}{n} < \alpha + \varepsilon$  より  $\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{a_n}{n} = \alpha$  である.

[4] (1)  $\{2, 3, 4\} \subset A$  である.  $0 \in C \in \mathcal{O}$  に対して  $X \setminus C$  が空集合, または有限集合であるから  $C$  は無限集合である. よって  $C$  は  $A$  の部分集合でない. よって  $A^i = \{2, 3, 4\}$  である.  $x \in X \setminus A$  は  $x \neq 0$  であるから  $x \in \{x\} \subset X \setminus A$  より  $A^e = X \setminus A$  である.  $0 \in C \in \mathcal{O}$  は  $C \cap X \setminus A \neq \emptyset$  となるから  $A^f = \{0\}$ .

(2)  $x, y \in X \setminus \{0\}$  に対して  $x \in \{x\} \in \mathcal{O}, y \in \{y\} \in \mathcal{O}, \{x\} \cap \{y\} = \emptyset$  である.  $x = 0, y \neq 0$  に対して  $x \in X \setminus \{y\} \in \mathcal{O}$  であり  $x \in \{x\} \cap (X \setminus \{y\}) = \emptyset$  である. よってハウスドルフ.

(3)  $X$  の開被覆  $S = \{U_\lambda \mid \lambda \in \Lambda\}$  を任意にとる.  $0 \in U_\lambda$  となる  $\lambda \in \Lambda$  が存在する.  $0 \in U_\lambda$  であるから  $X \setminus U_\lambda$  は有限集合か空集合である. 空集合なら  $\{u_\lambda\}$  が有限部分被覆となる. 有限集合なら  $X \setminus U_\lambda = \{x_1, \dots, x_n\}$  とできる.  $x_i \in U_{\lambda_i}$  となる  $\lambda_i \in \Lambda$  が存在する.  $\{U_{\lambda_1}, \dots, U_{\lambda_n}, U_\lambda\}$  が有限部分被覆となる. よってコンパクト.

(4)  $f: X \rightarrow Y; n \rightarrow 1/n$  とする.  $f$  は全単射である.  $U$  を  $Y$  の開集合とする.  $0 \notin U$  なら  $0 \notin f^{-1}(U)$  より  $f^{-1}(U) \in \mathcal{O}$  である.  $0 \in U$  ならある  $\varepsilon > 0$  が存在して  $(-\varepsilon, \varepsilon) \cap Y \subset U$  である.  $0 < 1/n < \varepsilon$  なる  $n$  は無限個存在するから  $U$  は無限集合である. よって  $f^{-1}(U)$  は  $0$  を含まない無限集合であるから  $f^{-1}(U) \in \mathcal{O}$  である. よって  $f$  は連続.

$0 \in B \in \mathcal{O}$  に対して  $Y \setminus f(B) = f(X \setminus A) = \{1/n_1, \dots, 1/n_m\}$  は閉集合. よって  $f(B)$  は開集合.  $0 \notin A \in \mathcal{O}$  に対して  $f(A) = \{1/n \mid n \in A\}$  である.  $1/(n+1) < 1/n - \varepsilon_n < 1/n < 1/n + \varepsilon_n < 1/(n-1)$  なる  $\varepsilon_n$  が存在する. よって  $(1/n - \varepsilon_n, 1/n + \varepsilon_n) \cap Y = \{1/n\}$  より  $f(A)$  は開集合. よって  $f$  は同相.